九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

契丹の回跋部女直経略に就いて

日野, 開三郎

https://doi.org/10.15017/2338998

出版情報：史淵. 46, pp.1-43, 1951-02-15. 九州大学文学部
バージョン：
権利関係：

契丹の回跋部女直經略に就いて

日野開三郎

目次

諸言
一　回跋部女直の登場とその反契丹活動
Ⅰ　回跋部女直の登場
(1)　大渤海の回跋城と回跋河
(2)　女直の回跋河流域入拠
(3)　回跋部女直の成立
Ⅱ　回跋部女直の反契丹活動
(1)　後渤海の建國・元惹の発展とその反契丹活動
(2)　回跋部女直の反契丹活動
二　契丹の回跋部女直經略
Ⅰ　聖宗時代の經略
(1)　開泰年間に於ける回跋部女直の入貢
(2)　太平年間に於ける回跋部女直の高麗投入（以上本輯）
(3)　大延琳の叛乱と回跋部女直の契丹離反
Ⅱ　興宗時代の經略

契丹の回跋部女直経略に就いて
(1) 蒲盧毛朶部の反契丹活動とその経略
(2) 回跋部の経略
三 回跋部女直の対外貿易活動と政治的動向
Ⅰ 女直の対外貿易活動概観
(1) 中國との貿易活動
(2) 高麗との貿易活動
(3) 契丹との貿易活動
Ⅱ 回跋部女直の対外貿易
(1) 高麗との貿易活動
(2) 中國との貿易活動
(3) 契丹との貿易活動
Ⅲ 回跋部女直の政治的動向と対外貿易
(1) 回跋部女直の内部関係
(2) 回跋部女直の政治的動向と対外貿易
四 契丹の回跋部女直統御策
Ⅰ 契丹の女直統御策概観
(1) 熟女直の統御策
(2) 生女直の統御策
Ⅱ 回跋部女直の羈縻統御
(1) 軍備配置
(2) 官爵授升
(3) 賞賜と貿易

余　言

緒　言

北流松花江の一支たる輝發河の流れに沿う狹長な谿谷は、古来通古斯系の一有力集団の拠る所となり、滿洲史の上に常に重要な役割を演じてゐる。有史以来大渤海の滅亡する迄は、濊貊系に属する夫餘族及びその族裔たる粟末靺鞨が此の地に拠つて居たが、大渤海の滅亡後は代つて純通古斯系たる女直が主人公となり、以て近世に及んだ。大渤海滅亡後、即ち契丹時代に此の谿谷に住した女直人は回跋部と呼ばれて居た。回跋は回覇（北風揚沙錄）・噲拔（高麗史）等とも写され、何れも輝發の同音異訳である。北風揚沙錄[註1]に契丹末の回跋部女直に就いて[註2]

自咸州東北分界入宮口至東沫江。中間所居之女眞。隸契丹咸州兵馬司。與其國往來無禁。謂之回覇。非熟女眞。亦非生女眞也。

と記し、回覇部女直が咸州（開原附近）の東北分界入宮口より東沫江（松花江）に至る間、即ち輝發河の最上源より[註3]松花江との合流点に至る全流域にわたつて居住し、咸州兵馬司（契丹末設置）に隸して居たことを伝へてゐる。輝發の同音異訳たる回跋・回覇・噲拔等の名称が伝へられてゐることは、此の河名が契丹時代、恐らくはそれ以前に迄溯り得ることを示し、回跋部なる女直名も此の河名に因んで附せられたものであることが察せられる。それは黑水靺鞨・粟末靺鞨がそれぞれ同じ河名に因り、白山靺鞨が太白山に因つてゐたのと同じであらう。即ち回跋部女直はその名

称によつて輝發河の流域に興起した部族であることを知り得るのであるが、それが契丹末に於いても依然同じ流域に拠つて居たとすれば、此の部族は史上に名を著した契丹当初から末年迄此所を動かなかつたこととなる。而して契丹が此の回跋部女直を招服羈縻した過程を見るに、長い歳月と何回もの經略とを要してゐる。本稿は此の契丹の經略を中心として同時代の回跋部女直の動向を探究す可く起草したものである。

契丹の回跋部經略は、その中葉全盛期の精力を殆んど傾け尽し、殆んど契丹末に至る迄の長い期間を継続して行はれた東部滿洲大經略の一部をなすものである。東部滿洲には、周知の如く、初め海東の盛國と謳はれた大渤海國が栄えて居り、それが契丹に滅された後ちは、一時その子國として置かれた東丹國の支配に帰したが、東丹國が熾烈な渤海遺民の叛抗に堪え得ずして遼陽方面に後退して後ちは再び渤海遺民によつて建てられた後渤海の支配に帰し、更に後渤海王國の実権は兀惹部の手に移り、此の兀惹部が後渤海王室を擁して久しく東部滿洲の実権を掌握してゐた。回跋部も亦その隷下に属してゐたのである。而して後渤海・兀惹と契丹とは不倶戴天の仇敵関係に在り、東部滿洲統合の威力を以て積極的に契丹の東辺を攻掠し一大脅威となつたので、[註4] 契丹としても此れをそのまま放置するを許さず、かくて長年月と大精力とを注入した經略が行はれたのである。本稿の主題たる回跋部經略も結局此の後渤海・兀惹經略の一部に外ならず、従つてその考察も後渤海・兀惹經略の一部として取扱ふことにより初めてその意義を正しく理解し得るのである。よつて本稿は終始此の立場に依りつつ論究を進めることとする。後渤海の建國と兀惹部の発展及びその対契丹攻勢に就いては已に專考の詳論を発表してゐるので、[註5] その結果は取つて直ちに此所に利用する。此の滿洲側の攻勢に対する契丹側の反撃、即ち東部滿洲の大經略に就いては未だ発表したものなく、その一部たる本題の回跋

部經略が最初であるが、然し研究は大体終へてゐるのでその成果も亦援用し、その旨註記して後日の続稿に証論の責を塞ぐこととする。

契丹の回跋部經略を研究する第一の基礎史料は遼史であるが、その記事頗る乏しく、回跋部と明記せる經略関係の有力な記事は全巻を通じて僅かに左表の六回にすぎぬ、此の外にも回跋の文字を使用した記事が無いではないが、さして参考となる程のものではない。又文献の豊富な中國側に就いて見るも、先掲無名氏の北風揚沙錄に見える簡單な記事以外に遼史の不備を補ふに足る程のものは見当らない。次に朝鮮側の史料たる高麗史に就いて見るに、明かに回跋と受取れる記事は左表の両記事のみである。然も此の所傳には、本文に論述する如く、大きな疑問を含んでゐて、

表一、遼史所載回跋部記事表

年号			西暦	月日	記事	巻数
契丹	北宋	高麗				
開泰八年	天禧三年	顯宗一〇年	一〇一九	三月癸未	回跋部太師踏剌葛来貢	巻一六及六九
同	同	同	同	七月己巳	回跋部太保麻門来貢	同上
重熙一二年	慶曆三年	靖宗九年	一〇四三	四月己亥	置回跋部詳穩都監	巻一九及六九
同一七年	同 八年	文宗二年	一〇四八	六月辛卯	長白山太師柴葛・回跋部太師撒剌都来貢方物	巻二〇及六九
同一八年	皇祐元年	同 三年	一〇四九	五月庚戌	回跋部長元迭合札等来朝	同上
同一九年	同 二年	同 四年	一〇五〇	六月壬申	回跋・鳥蘇館・蒲盧毛朶部各遣使貢馬	同上

そのまま信憑活用し難いものである。以上の外、回跋部と明記せる有力な資料は、管見内に於いては検索し得ない。

表二　高麗史所傳噲拔記事表

年号		西暦	月日	記事	巻数
高麗	顯宗一九年	一〇二八	七月丁酉	東女眞噲拔部落三百余戸来附	巻五
契丹	太平八年			東女眞大相噲拔率其部族三百余戸来投。賜渤海古城地處之	
北宋	天聖六年				
顯宗二〇年	太平九年	一〇二九	八月乙未		同上
	天聖七年				

かかる史料の寡少は回跋部の研究を頗る困難ならしめ、絶えず推論に推論を重ね、迂遠な論証過程を辿つて行かざるを得ぬ不便を痛感せしめる。加ふるに駑材の致す過誤・不行届も重出するを免れ難いであらう。幸に大方の叱正を得んことを希ふ次第である。

註　1　遼史拾遺巻一八及び文獻通考巻三二七・四裔考・女眞の項に引く。通考に入宮口とあり、拾遺に入室口とある。何れが是か判らない。

2　記事中に見える咸州は聖宗の開泰八年の設置であり、更に咸州兵馬司は遼末天慶年間に至つて初めて遼史に散見し、その遼末の設置なることが窺はれ、延いては此の記事が遼末の狀態を伝へたものであることを推定し得る。

3　入宮口の一句は判らないが、輝發河の上源分水嶺は恐らく契丹の領土と非遼籍地との界をなし、その分界上の出入口であらう。尙「入宮口」が別伝「入室口」となつてゐること、已述の如くである。

4　以上、後渤海と元惹の契丹攻勢とに就いては、帝國學士院紀事二卷三号所載の拙稿「後渤海の建國」、史淵二九輯乃至三三輯所載、拙稿「元惹部の發展」参照。

5　註4参照

一　回跋部女直の登場とその反契丹

回跋部女直に対する契丹の經略を考究するには先づ此の女直の歴史舞台への登場と、契丹の經略に先行する彼等の反契丹活動とより究明して行く必要がある。然も関係史料の少い回跋部女直に就いて此れらの問題を究明することは決して容易でない。史料乏少なるが為めに多大の論証を要し、且つその成果も満足するに足るものを得難いのである。

I　回跋部女直の登場

女直の部族名としての回跋の名称が史上にはつきりと伝へられてゐるのは契丹の聖宗・開泰八年（一〇一九）以後であるが、此の時已に彼等は確たる勢力を張つて居たのであるから、その由来が更に既往に溯ることは云ふ迄もない。然しその歴史的勢力としての始点をどこ迄溯らせ得るかは解決困難な問題である。只此所に一つの有力な手掛りとなるのは大渤海の回跋城である。河水名・城名・部族名等を通じ、史に伝へられる回跋の名は、管見の限り、此れが最も古い。そこで先づ此の回跋城より考説する。

(1) 大渤海の回跋城と回跋河

契丹が英傑阿保機の統率下に塞外制覇の大業を推進しつつあつた時、その最大の強敵となつたのは東方の大渤海國であつた。当時の大渤海國本土の西境は北は扶餘府（農安附近）、南は長嶺府（奉天省・北山城子）附近に限られ、従つて東遼河・遼河及びその支流の渾河・蘇子河等の流域一帶は直轄領土外の地となつてゐた。此所には唐の聖曆二年（六九八）以来小高句麗が建國せられ、安史の乱以後百数十年の久しきにわたつて渤海の属国となつてゐた。阿保機は初めより大國大渤海と正面衝突するの危険をさけ、先づ此の小高句麗の侵略に着手し、可汗即位前よりその領土を蚕食し、神冊三年（九一八）遂にその首都遼陽を陥れて小高句麗を滅した。[1] そして此の地に住む渤海人・女直人・漢人等を懐撫する外、更に中國より擄掠した夥しい漢人を徙し、棋・同・銀・遼・瀋・鐵利・歸・嚴州・東平郡等を置いて此れらの諸族を統治した。[註2] 東平郡は後ちに遼陽府と更め[註3]られた所、瀋州は今の奉天、歸州は撫順、遼州は新民縣の東北遼濱塔の地で、何れも当時の南滿に於ける要地であつた。小高句麗を滅してその地を併呑した結果、契丹の東境は渤海の扶餘・長嶺二府と直ちに境を接することとなつた。小高句麗の領土たる南滿の大沃野を收めたことは契丹の発展に対し経済的に大きく寄与したこと勿論であるが、又軍事的にも対渤海上に少からぬ意義を有してゐた。

大渤海西境の要地をなして居たのは先に述べた扶餘府と長嶺府とであつた。扶餘府は「契丹道也」と謂はれてゐる如く大渤海と契丹との交通第一幹線上の門戸を扼する要地で、「常に勁兵を屯し契丹を扞いで」ゐた。長嶺府は「營州道也」と謂はれてゐる如く營州（朝陽）を経て北支に入る滿華交通幹線上の門戸を扼する要害であつた。所謂營州道は大渤海の首都龍泉府（東京城）より瑚爾喀河上流を溯つて顯德府（樺甸縣）に出で、それより輝發河を溯り長嶺

府を経て渾河の上流に出で、此れを下つて歸・瀋・遼陽を通り、遼河を渡つて營州に入り、更に北支の中心幽州（北京）に至る街道であつた。「幽州節度府と相聘問す」と伝へられてゐる如く、此の幹線に由る渤華の往来は相当盛んであつた。[註4] 阿保機は中原を攻めて營州を奪り、又渾河の上流に迄勢力を浸透して歸州（撫順）を置いたのであるから、此の營州道に沿ひ長嶺府方面から大渤海に進攻し得る態勢を整へたわけである。又東遼河流域をも收めた結果として、阿保機の勢力は直ちに扶餘府にも接し、此所からも進攻し得る態勢が出来たわけである。要するに小高句麗を滅してその領土を併せた阿保機はそれによつて大渤海に侵攻する南（長嶺府）北（扶餘府）二道の軍事基地を獲得したのである。尙夫の小高句麗經略に当つて用ひられた本國・遼東間の交通幹線は龍化州・遼州を結ぶ街道であつた。

二大前進基地を獲得して機の到るを俟つてゐた阿保機は天贊四年（九二五）十二月乙亥、愈々大渤海遠征を宣言した。此の時の戰鬪狀況に就いては当面の問題でないから一切省略するが、阿保機が此の時を進攻の好機として選んだ要因の一は大渤海國内に起つた大規模な内訌に在つたこと、扶餘道を進擊したこと、契丹國軍の主力を殆んど傾け尽した大遠征であつたこと、一路渤海の首都泉龍府に殺到する速戰作戰であつたこと、從つて遽過作戰であつたこと等[註5]は何れも後述する部分と関係が少くないので此所に一言しておく。

宣戰を布告した阿保機は翌十二月壬辰、木葉山に祠り、龍化・遼州路を取り、それより北進して同月丁巳（木葉山より二十五日目）、扶餘府を攻囲し、翌天顯元年正月庚申（三日目）これを拔き、それより東に驀進して龍泉府に向ひ、同月丙寅（六日目）、大渤海の邀擊軍を打破つて首都を囲み、越えて己巳（三日目）、大渤海王大諲譔を降し、続いて丁丑（八日目）、大諲譔が再び叛したのを攻めて翌朝早くも此れを擒へた。木葉山を発してより大諲譔の第一

次降服迄僅かに三十七日、再叛を討つて完全に制圧擒王する迄四十六日を費してゐるにすぎない。更に扶餘城を囲んで初めて兵を交へた日より起算すれば、王の第一次請降迄十二日、再叛擒獲迄二十日を計へるにすぎない。[註6]

阿保機の進攻作戰がこの様な急襲遽過作戰であつた為め、その擊破した府は大渤海十五府（六十余州）の中の二府にすぎず、他の諸府は皆無疵のままであつた。從つて此れら十三府の処理收拾が大きな問題として残されてゐた。

阿保機は先づこれら十三府及びその管下数十州に対し招撫政策を採り、大諲譔擒捕三日後の天顯元年正月甲戌、諸州に対して詔諭を下した。続いて二月丙午（詔諭より十六日目）、渤海の國號を東丹と改め、皇太子の倍を國王とした。即ち阿保機は大渤海國を事実上討滅し乍ら、名義的には此れを存続せしめる形式を採り、只國名を東丹國と改称した体に装ひ、彼の長子たる皇太子倍を國王に据え、大臣等の高級官吏には丹・渤両民族を半々に用ひたのである。蓋し東丹國を大渤海國の改称国なりとする建前によつて大渤海國の統治権をそのまま東丹國に引継ぎ、未經略の十三府諸州縣に対する主権保持の名分的根拠を保有せんとしたものと解せられる。然るに渤海人は挙つて契丹の主権を排撃し、各府州何れも熾烈な叛抗を続けた。中には一時詔諭に応じた府州もあつたが、忽ち離れ叛いて東丹國の前途に陰翳を投じた。そこで阿保機は龍泉府に屯駐せる遠征軍の精鋭を四方に分派して叛乱諸府州の武力彈圧を敢行した。[註7]この分遣軍の第一陣として最初に送り出されたのは、遼史卷二太祖紀・天顯元年三月戊午（東丹國建設後十二日目）の條に

遣夷離堇康默記・左僕射韓延徽攻長嶺府。

とある康默記等の長嶺府攻略軍である。此の軍團の活動に関する詳細な点は考証を必要とする部分が少くないのであ

るが、その考証過程や詳述は一切割愛し、只考証によつて得た結果の概要を紹介すると左の如くである。

長嶺府攻略軍は康默記・韓延徽等の率ゐる漢人部隊と、蕭阿古只の率ゐる契丹人部隊とより成り、龍泉府を出発し、先づ大渤海の中京顯德府の地を經略し、西京鴨綠府より応援に馳せ参じた渤海兵七千騎を撃破し、同年八月辛卯、漸く目的の長嶺府を降した。龍泉府を発してから実に五箇月も後ちのことである。所で遼史卷七三蕭阿古傳には契丹軍の將として長嶺府の攻陷に功を立てたことを

上略。遂進軍破回跋城。

とて回跋城の攻破として伝へてゐる。これによつて長嶺府と回跋城との攻陷が同義であつたこととなる。思ふに回跋城は長嶺府の府城で、龍泉府の府城が忽汗城と呼ばれたのと同様であらう。尙同書卷七四康默記傳には長嶺府と回跋城とを全く別個の地点として扱つてゐるが、これは明かに遼史の撰者の誤りである。

龍泉府を発してより長嶺府を攻陷する迄には実に五箇月の日子を費してゐる。このことは經略軍の進撃路上に於ける渤海人の叛抗が各地で頑強に行はれ、丹軍得意の快進撃を鈍らせたことを示す。即ち阿保機は渤海諸府州の經略に於いて長嶺府を眞先におき、而してその經略を命ぜられた分遣軍は頑強な抵抗を受けて目的達成迄に五箇月を要したのである。阿保機がこの困難な經略を第一において急いだのにはそれ相当の理由があつた筈である。

契丹の東方經略の幹線街道をなす龍泉府への途は、先に述べた如く、扶餘街道と營州・長嶺府街道とがある。扶餘街道は已に大渤海遠征の丹軍によつて踏破啓開せられてゐたが、營州・長嶺府街道は未だ打通してゐない。よつて此の街道を打通し、龍泉府より瑚爾喀・輝發・渾河の諸水に沿うて契丹の歸州（撫順）・東平郡（遼陽）に至る往来を

確保しておけば、龍泉府に在る丹軍の後方聯絡は一段と強化し、遠征軍の安全度が大となる。阿保機の長嶺府攻陷を急いだ所以は此所に求む可きであらう。

さて此の攻略に於いて当面の問題となるのは回跋城の名である。回跋の名が遼史に見えるは此れが最初であり、同時にそれは管見の限り史上初見の記事でもある。然し回跋城が長嶺府の府城である以上、その由来は長嶺府の由来と当然密接な関係を有つてゐた筈である。即ちその築城は府の設置と略々同時か、仮に府の設置に先後してゐたとしても長い時間の開きは無かつたであらう。回跋城の名は大渤海の盛時より已に存してゐたものと見て大過ないと想はれる。回跋城の名は恐らく回跋河の名に因んだものであらう。それは龍泉府の府城忽汗城の名が忽汗河（瑚爾喀河）又は忽汗海（鏡泊湖）に因んでゐるのと同様であらう。果して然らば現在の輝發河の名は回跋河の音写に於いて大渤海時代（大唐時代）迄溯り得ることとなる。従つて回跋河の名に因む通古斯族の部名は大渤海時代に迄溯らせてその存在を推定する可能性が生れて来る。但しそれは可能性に止まり、進んでその存在を推定するには更に他の面からも考察を進めて行かなければならぬ。

東部滿洲に拠つた通古斯種の部族名には、隋唐以後、その住域内の大河の名に因んだものが少くない。隋初以来史に著れる粟末靺鞨・黑水靺鞨・安車骨靺鞨等は皆その例である。同様に遼代の回跋女直も亦その一例をなすものに外ならぬ。かうした隋初以来の例は倍々回跋部の名を有つ部族の存在を渤海時代に溯らせ得る可能性を強める様に思はれる。然し乍ら此の問題は更に女直（女眞）と呼ばれる通古斯種の歴史を併せ考へた上で慎重に決定して行かなければならぬ。

(2) 女直の回跋河流域入拠

回跋部女直の出現は女直と呼ばれる種族が回跋河の流域に入拠蔓延してからのことでなければならぬ。そこで女直の回跋河流域入拠の時代が重要な研究対象となるが、それに聯関して先づ此の女直（女眞）の族系に就いて一考しておく必要がある。

女直が通古斯系の民族であることは更めて云ふ迄もない。所で遼史は滿洲の通古斯種を総て女直と呼んでゐるのでは無く、別に渤海人と呼んでゐるものがあり、彼是区別して扱つてゐる。そこで此の渤海人と女直人との関係も明かにしておく必要がある。然し此の渤海人と女直人との関係は專考を要する複雑な重要問題であり、此所に委曲を悉すことは出来ないので、その大要を概説するに止める。

渤海人なる族名は渤海國に由来する。渤海建國の中心となつたのは粟末靺鞨・白山靺鞨・高句麗人等の所謂濊貊系通古斯族であつた。彼等は更に達姤・鐵利・越喜・虞婁・拂涅等の純通古斯系諸靺鞨をも征服して領民に加へたが、此の国の支配階級は彼等濊貊系を中心として構成せられてゐた。濊貊系・純通古斯系共に渤海國民であるとの意味に於いては何れも渤海人であり、又渤海人の用法にはさうした意味での例も多いが、渤海國が滅んで後ちも尙民族名として長く用ひられた渤海人は嘗ての渤海國の支柱となつて居た濊貊種であつた。さうして此の渤海人に対置せられた女直は純通古斯系諸族であつた。但し純通古斯種でも長年の大渤海國の支配下に在つてこれと同化し、生活様式・國民感情・利害環境等を齊しうするに至つたものは渤海人と見なされ、此の名を以て呼ばれてゐる。反対に渤海人で種々の事情から女直集團の中に入り込み、此れに混融して女直人と見なされ、此の名を以て呼ばれてゐるものもあつ

た。

濊貊種は通古斯種に蒙古種の血を混じたもので、言語・習俗・文化・歴史その他殆んど凡ゆる点で純通古斯種と異つてゐた。夫餘・沃沮・高句麗等の名を以て漢魏の頃已に史に現れ、その由来は恐らく先秦時代に溯る。有史以来、純通古斯種よりも経済・社会・政治・文化すべてに於いて立優り、民度遙かに高かつたが、大渤海時代にその支配階級として一層開化し、満洲東蒙古を通じての最高文化民族となつてゐた。純通古斯種は挹婁・勿吉等の名を以て早くより史に現れてゐるが、濊貊種に比して民度低く、未開原始の域に在る者が多かつた。

渤海建國当時の濊貊種、即ち渤海人の住域は伊通河との合流点附近より上流の北流松花江本支流域（松花江・伊通河・輝發河等）東遼河流域（以上、夫餘人即ち粟末靺鞨人）、咸鏡道・間島・敦化地区（以上沃沮、即ち白山靺鞨）及び鴨綠・佟佳・蘇子河流域（以上高句麗人）等に跨り純通古斯種は最下流北流松花江及び拉林河の流域（達垢靺鞨）、阿勒楚喀河流域（安車骨→鐵利靺鞨）、瑪顏河流域（越喜靺鞨）、瑚爾喀河流域（虞婁靺鞨）、その東方日本海に至る地域（拂涅靺鞨）、三姓以東の松花江最下流域（黑水靺鞨）等に蔓延してゐた。即ち回鶻河の流域は渤海建國当時は濊貊種の住域の眞只中に在つたのである。純通古斯系の女直の入拠はそれ以後と解しなければならぬ。[註9]

所が遼史に拠るに、此の濊貊種即ち渤海人の本拠たる上述の地域内に遼初以来女直人が相当蔓延してゐる。即ち阿保機はその可汗即位前たる唐の天復三年（九〇三）と天祐三年（九〇六）とに開原より北方東遼河流域の女直を伐つたと伝へており、[註10]又太宗の會同三年（九四〇）には鴨綠江下流左岸の地に住して居た鴨綠江女直の入貢を伝へてゐる。中國側の文献を見るに同光三年（九二五）五月女眞入貢の記事があり、[註12]後周の顯德六年（九五九）にも入貢の所

傳がある。[註14] 中國への入貢路は鴨綠江を下り遼東半島より山東に入つて居たもので、その主体をなしたものは鴨綠江流域のものや咸興平野の三十部女直等であつた。又高麗史 卷二 定宗世家・三年（九四八）九月の條にも東女眞が馬七百匹を以て入貢したことが見える。此の女眞も亦咸興平野の者と解せられる。以上は大渤海滅亡の年（九二六）を中心としてその前後約五十年間に於ける女直関係の主な記事である。此れによつて渤海滅亡直後は勿論のこと、その二三十年前に於いて已に純通古斯系たる女直が滿洲一帶に蔓延して居たことを確認することが出来る。

渤海建國当時、純通古斯系たる達姤・鐵利・越喜・虞婁・黑水・拂涅等の諸靺鞨が住してゐた地域を大觀するに、東流松花江の流域と瑚爾喀河以東の森林地帶とで、明かに濊貊系の北隣に接してゐた。そして濊貊系の建てた渤海が彼等を征服してその領土領民に加へたのは開元・天寶の交（七四〇頃）であつた。[註15] してみると、純通古斯種はそれより唐末（九〇〇頃）に至る大約百五十年間に濊貊種の住地に北隣する右の地域から次第に濊貊種の住地に浸透蔓延して全滿洲に拡つたものと見なければならぬ。純通古斯系靺鞨諸部と女直諸部との具体的な関係は判らないが、恐らくこの純通古斯系靺鞨が蔓延して西南下したものが先づ契丹人に接して女直の名で伝へられ、東南下して咸興に入り更に鴨綠・佟佳江方面に入つて中國人・半島人に接した者が女眞の名を以て伝へられたのであらう。即ち大渤海時代に於いて純通古斯系諸部人の大規模な南下があつたことを推断せざるを得ないのである。翻つて高麗史を見るに、太祖世家三年（九二〇）、即ち大渤海滅亡七年前の條に黑水・達姤等が高麗の東北辺より或は来投し、或は侵掠したことを伝へており、更に太祖の軍中に黑水・鐵利・達姤等の外蕃部隊の居た所傳もあつて、大渤海國の治世中に彼等の中の尠からぬ者が咸興方面に移住してゐたことを確証し、先の民族移動の推定を裏づけてゐる。而してこの黑水の咸興

方面への出現は已に新羅・憲康王の十二年（八八六）[註16]、即ち渤海滅亡前四十年の昔にその確実な所傳がある。

回跋河流域は元来粟末靺鞨、即ち濊貊系の住地である。それがいつしか回跋部女直と呼ばれる純通古斯系の住地に変つてゐるのも、右の様な純通古斯種の大規模な南下の波に乗つた集團の入住に因つたものに相違なく、その時期は大渤海の治世、恐らく天寶以後のことであらう。然し乍らこの入拠の時を以て直ちに回跋部女直の歴史的な活躍の始期と見ることは早計である。歴史的勢力としての回跋部の成立に就いては更に詳考する必要がある。

(3) 回跋部女直の成立

大渤海國内に於ける純通古斯種の当初の住域は北満地方であり、南満地方は濊貊種の住域であつた。従つて純通古斯種の南下は濊貊種の住域への蔓延であつたこととなる。而して此の南下は大渤海時代に行はれたのであり、大渤海時代を通じて濊貊種の支配的地位、純通古斯種の被支配的地位は動いてゐない。従つて純通古斯種の南下は濊貊種を駆逐したり征圧したりして行はれたものではない。即ち濊貊種の住域への蔓延は彼等が濊貊種に取つて代つたのではない。支配・被支配の関係は変ることなく、濊貊種の支配に服し乍らその住域の間に浸透して行つたもとの解す可きである。そしてかように濊貊種、即ち遼史が謂ふ所の渤海人の支配下に服しつつ浸透して行つた純通古斯種、即ち遼史が謂ふ所の女直人が浸透移入と同時にその地方の政治的勢力として表面に直ちに浮かび上るを得たとは断ぜられない。下部構成層としての潜在力を有ち、移住者の増加と共にその潜在的な勢力を増大したとしても、渤海人の政権たる渤海国が健在する限り、現実の政治的勢力として表面に活躍することは出来なかつたと考へられる。彼等が不羈奔放の自由を獲得し、政治的な勢力として表面に活動する為めには、此の彼等を上から抑制してゐた渤海人の支配が取

除かれねばならぬ。そして此の渤海人の抑制を取除いたものこそ、阿保機の渤海國討滅であつた。

大渤海國を討伐攻滅した阿保機はそれに引続く渤海人の叛乱鎮定や諸州縣の經略によつて捕へた渤海人俘虜を挙げて契丹本土に強制移住せしめた。その総数は判らないが夥しいものであつたこと丈は紛れない。[註17]

大渤海を滅した阿保機はしばらく龍泉府に滞留してゐたがやがて凱旋の途に就き、その年七月辛未、扶餘府の地で病を得て陣歿した。即ち長嶺府が陥落する前月、彼は已に世を去つて居たのである。彼の歿するや、長子たる東丹國王の倍、その弟の大元帥堯骨等、何れも柩を追うて東丹國より契丹の首都に馳せ還り、そこで両人は皇位継承の大暗闘を続けた。東丹國内の渤海人の叛抗は此の内訌に乗じて益々激化し、天顯二年（九二六）十二月、堯骨が制勝して皇位に即いた時は、東丹國のそのままの維持は望めない狀態にまで悪化してゐた。又一面からいへば、東丹國は皇兄倍の封國でもあつたので、此の兄を差措いて即位した堯骨、即ち太宗は東丹國をそのままにして兄をそこに放還することは危險であつた。そこで太宗は兄の倍を軟禁し、その封國たる東丹國の事実上の抹消をはかつた。かくて天顯三年十二月、東丹國の首都を遼陽に後退せしめ、併せて夥しい東丹國人、即ち渤海人を遼陽附近一帯に強制遷住せしめた。つまり東丹國の契丹直轄領土内への移転である。それと同時に東丹國の新首都遼陽を契丹の南京とし、次いで東京と改め、東丹國を完全に契丹の制圧下に封じて終つた。此の時遷された渤海人の数も夥しく、阿保機の駆遷と併せて少く見積つても数十万に達したであらうと推測せられる。[註18]勿論、渤海人は此の駆遷を嫌ひ、契丹の手を免れて逃亡竄匿したものも少くなかつた。遼史卷三太宗紀・天顯三年十二月の條に東丹國人駆遷のことを伝へて

上略。遷東丹民以實東平遼陽。其民或亡入新羅・女直。

とあるは駆遷を嫌つた渤海人の逃亡竄匿先を示す。遼史にいふ新羅とは半島の地のことで、新羅國のことではない。新羅國は已に亡んでおり、当時の半島を統べてゐたのは高麗である。かうした意味に於ける新羅の用例は遼史その他当時の文献に間々散見してゐる。女直とは渤海人の支配下に在つた純通古斯種で、上述の新羅の如く国外の地に住んでゐた者ではない。国内に蔓延して居た従来の被支配民たる女直人の間に逃入竄潜したことを意味する所傳である。

上述の如く契丹からの大打撃を受けてその口数は大いに減じ、更に國家団結の組織を寸断粉碎せられた渤海人の勢力が遽に減退したことは想像に難くないであらう。而してそれは今迄渤海人の支配下に抑へられ乍ら恰も地下水の如く此の支配者の住域に浸透蔓延しつつあつた女直人の擡頭に絶好の機会となつた筈である。蔓延せる各地の女直人が此所に不羈奔放の自由を握る機を得て漸く歴史の表面に浮かび上つたことは容易に推想せられるであらう。

女直人擡頭の大勢を以上の如く概観して、次に回跋部女直の歴史的勢力成立の過程を推究して見る。

女直人の回跋河流域への蔓延が大規模な純通古斯種南下の流れの一部をなすものであり、それが渤海時代のことであつたことは先に推考した。彼等はそこで渤海人の支配に隷してゐたわけである。渤海時代の回跋河谿谷の地は長嶺府の所管であり、府下は更に瑕・河二州に分けられ、二州は各々若干縣に分けられてゐた。[註19] 従つて此の谿谷に入り来つた女直人も恐らく此れら州縣に分属してその統督を受けてゐたのであらう。勿論、現実には渤海國の統督の行届かぬ深山僻谷に住む集団もあつたであらうが、ともかく建前は渤海の地方行政機関たる府州縣に属することとなつて居たであらう。かうして州縣に分属してゐた女直人を渤海人とは別に一括し回跋女直と呼ぶ習俗が広く行はれてゐた

とは解しにくい様に思はれる。寧ろ瑕州女直・河州女直等の呼び方が可能性多い様に想はれる。

所で此の渤海の行政体制は康默記等の攻略や東丹國引揚げの際の強遷で打碎かれ、渤海人は減少して女直人に擡頭の機会を与へた。回跋河流域の女直人が表面の勢力として歴史に浮かび上つたのは恐らく此の際で、同時にそれは回跋部女直として一括せられる端緒ともなつたものと思はれる。

契丹への叛抗に敗れ、或は強制駆遷を嫌つて逃亡竄匿した渤海人は此の地方にも多かつたであらう。此の地から高麗に逃入するは、必ずしも不可能ではなく、又後述する如くその実例も伝へられてゐるが、然しそれにしても甚だ容易でなかつたことは、その地理的関係から窺はれる。従つて回跋部女直の中に逃入した反契丹感情の強い渤海人は少く無かつたであらう。

要するに、回跋部女直成立の準備過程としての純通古斯種の回跋河流域への移住蔓延は大渤海隆昌時代の下に行はれたが、それが不羈奔放の自主的活動力を有つ勢力としての回跋部女直に成立したのは大渤海滅亡直後の時期でありそれと同時に反契丹的渤海人分子の亡命を多数その中に内包したと考へられるのである。

Ⅱ　回跋部女直の反契丹活動

渤海人の完全な制圧が除かれて満洲の一勢力にのし上つた回跋部女直は、大いに活躍の自由を得たとは云へ、尚残存せる渤海人勢力に指導せられ、此れを助けて反契丹活動を展開し、それが結局契丹の經略を被る所以となつた。此の残存渤海人勢力とは後渤海・兀惹等である。後渤海・兀惹に就いては嘗て詳考を発表してゐるが、[註23]考説を進める便

宜上此所にその大要を概説し、此の渤海人残存勢力の活動の一部を担つた回跋部女直の反契丹活動に就いて言及することとする。

(1) 後渤海の建國・兀惹部の発展とその反契丹活動

東丹國を遼陽に後退せしめた契丹の太宗は、扶餘府を黄龍府と改めて直轄領土に加へ（東京道に属す）た外、他の大渤海故領の地は尽く放棄した。此所に於いて契丹に叛抗しつつあつた大渤海最後の王大諲譔の弟（逸名）はその糾合せる渤海人残存勢力を率ゐて龍泉府の故都に入り渤海國を復興した（後渤海）。時に諲譔の世子大光顯も亦渤海人を率ゐて鴨綠府（臨江縣）に拠つてゐたが、後渤海は此れを高麗に逐ふてその地を併せ、更に各地を次第に經略して、契丹の黄龍府となつた扶餘府の地を除く大渤海の故領を再び統一した。然し後渤海王室の実権はやがて兀惹部の世酋烏氏に移り、代々烏氏が執権としての地位を確保し、後渤海の王室は只名義的な存在と化した。即ち後渤海の実体は兀惹政権に外ならなかつたのである。[註21]

後渤海及び此れを奉戴した兀惹部は契丹を不倶戴天の仇として抗爭した。殊に兀惹部が後渤海の故領（扶餘府の地を除く）を完全に再統一した契丹の保寧年間（九六九―七八）頃からその契丹に対する抗爭は積極化し熾烈となり、しきりに契丹の東境を侵攻した。此の侵攻に回跋部が加担してゐるのである。兀惹部の対契丹攻勢に就いては嘗て詳考してゐるので此所には説明を略す。[註22]

大渤海滅亡の際及び東丹國西遷の際に夥しい渤海人が連れ去られた結果として滿洲に於ける渤海人の数は著しく減少した。加ふるに後渤海の建國に際し諲譔の弟に逐はれた世子大光顯一党数万人の高麗投入（九三四）があり、次い

で朴昇等數万人の投入（九三八）、更に定安國内に住む渤海人一派數万人の投入（九七九）、その他種々の内部事情による渤海人の高麗への投入が相次ぎ、又時に遠く中國へ投入する者もあつて、[23] 大渤海故地に残存する渤海人の勢力は年々薄弱微力化した。かうした国外への投入の外に、此れに伴ふ女直人部落の間への逃入竄匿者も少くなかつたと推測せられることは先に述べた如くである。かうした渤海人の微弱化の結果として後渤海の統治関係が「渤海人の支配・女直人の被支配」といふ大渤海時代の狀態をそのままで維持し難くなつたことは当然推想せられるであらう。有力女直人を支配層の中に加へ、渤海人の協力者としてその支配を維持しなければならなくなつたであらう。純通古斯系たる兀惹部の力によつて後渤海王室が支へられたのは、此の間の事情を示す有力な例である。兀惹部は後渤海の中央に於いて権勢を得たものであるが、地方に於いてもそれぞれ其の他の有力女直人が後渤海の協力者として此れに力を添へてゐた。そして此の有力女直人の後渤海（兀惹政権）への協力には、それら女直人部落の間に逃入した渤海人の指導が少からぬ影響を与へてゐる様である。後渤海（兀惹政権）が域内渤海人勢力の微弱化にも拘らず、大渤海故領の統合をよく維持し、進んで強国契丹に攻勢を展開し得た所以は実に新興女直人との協力に成績をあげ得たからである。要言すれば、後渤海（兀惹政権）は渤海人と女直人、即ち濊貊種と純通斯種との協調の上に立つてゐた国家である。大渤海は濊貊種の支配した国家、金は純通古斯種たる女直人の国家である。その中間に在る後渤海は滿洲の舞台が濊貊種の支配から純通古斯種の支配に移る過渡期に於いて両者の均衡協調の上に立つてゐた国であると云へる。それ丈に後渤海は大渤海や金に比して内部の紛糾が相次ぎ幾多の問題を続発せしめてゐるが、ともかく滿洲の統合を曲りなりにも保つてゐた、渤海國の正統後継者として後渤海を保つてゐた関係から契丹を仇敵とし、此の後渤海に協

従した女直も結局後渤海の対契丹抗爭に捲き込まれて行つたのであつて、回跋部女直の反契丹活動もその例に洩れぬものであつた。

(2) 回跋部女直の反契丹活動

後渤海を奉戴する兀惹政権の反契丹活動が最も激烈であつたのは、先述の如く、保寧年間で、此の保寧攻勢の中に回跋部が加はつて重要な活躍を演じた形迹が窺はれるのである。

遼史卷八景宗紀・保寧八年（九七六）八月の條に

是月。女直侵貴德州。

とあつて、女直が契丹の貴德州を侵掠したことが見える。貴德州は今の鐵嶺の南を流れる范河（汎河）の南岸撫安堡地方に比定せられてゐる。[註24] 此の方面に於ける契丹東境の州である。鐵嶺は契丹の銀州である。范河は輝發河の流域より銀州方面を経て契丹本土と往来する交通街道に当つてゐた。此の貴德州の攻掠は兀惹部の保寧攻勢の一部をなすもので、その指令は遠く龍泉府より発せられたものと解せられるが、その攻掠戰の主力部隊となつたのは、貴德州に近い回跋部女直であつたと見る可きである。此のことに就いて已に考証した所である。[註25]

同卷には翌九月辛未の條に

東京統軍使察鄰詳穩涸奏。女直襲歸州五寨。剽掠而去。

とあつて女直が続いて契丹の歸州を襲撃し五寨を掠したことが見える。此れ亦保寧攻勢の一部である。歸州は今の撫順に比定せられる。[註26] 歸州は阿保機が小高句麗を滅しその新城州の地に置いたものであるが、此の時の攻勢は余程甚し

く歸州を痛めたと見え、やがて廢州となつて終つた。歸州は輝發河流域より渾河に沿うて瀋州・遼陽に出る大幹線街道上の要衝に在つた。此の攻勢も亦龍泉府より発せられた指令であらうが、侵掠部隊の主力はやはり回跋部女直であつたと解せられる。恐らく貴德州攻掠部隊の転進したものであらう。[註27] 此れらの例により回跋部女直が後渤海を奉ずる兀惹政権に協従してその反契丹活動に重要な役割を担はせられ、契丹の東境に武力侵掠を加へてゐたことを知る。契丹として何時迄も此れを放任することは出来なかつた筈である。

註

1、小高句麗國に就いては別に詳考してゐるが、内容頗る長大なので発表の機会なく今日に及んでゐる。

2、阿保機の遼東經略に就いても別に詳考してゐる。

3、帰州に就いては遠からず発表する予定の「契丹の前帰州に就いて」参照。

4、以上交通関係の所伝は新唐書卷二一九渤海伝による。

5、此れらのことに就いては未発表の別稿「東丹國考」に於いて論述してゐる。

6、遼史卷二太祖紀による。詳細は「東丹國考」で論及してゐる。

7、以上も亦「東丹國考」に詳述。

8、註7に同じ。

9、渤海人・女直人の関係に就いては別に詳考する予定であるが、史淵三四輯「夫餘國考」、同三五輯「勿吉考」同三六輯以後に続く「靺鞨七部考」、前出「後渤海の建國」等、一連の拙稿は何れも此れと聯関を有つ内容の論文である。

10、遼史卷一太祖紀

11、遼史卷四太宗紀

12、冊府元龜卷九七二、舊五代史卷三二、五代史記卷五等に見える。
13、冊府元龜卷九七二、舊五代史卷一一七、五代史記卷一二等に見える。
14、史淵三六・七合輯号所載拙稿「靺鞨七部の住域」及び前出「後渤海の建國」参照。
15、此のこと、前出「小高句麗國の研究」に証論してゐる。尚別に渤海國の研究に於いて一層詳しく考察する心組みである。
16、三国史記卷一二新羅本紀に見えてゐる。
17、前出「阿保機の遼東經略」参照
18、前出「東丹國考」に詳論してゐる。
19、府州縣制は新唐書卷二一九渤海傳参照
20、前出「後渤海の建國」、及び「兀惹部の発展」
21、註20に同じ。
22、註20に同じ。
23、以上の投入に就いては「東洋史學」に発表予定の「定安國考」に詳述してゐる。
24、「オリエンタリカ」二号、池内博士「遼金時代の貴德州の位置に就いて」
25、前出「兀惹部の発展」参照
26、註(3)参照
27、前出「兀惹部の発展」参照

二　契丹の回跋部女直經略

後渤海を奉戴して大渤海の故領とその遺民を再び統合し、新に擡頭し来つた女直を引入れて契丹と対立抗爭せる兀惹の勢力は日増しに強大となり、それ丈に契丹東辺の脅威は日毎に増大しつつあつた。然るに大渤海の故領放棄を断行した太宗（九二七―九四六）は專ら中原の經略に力を注いで東方を顧ず、太宗以後逐次即位した世宗・穆宗（九四七―九六八）も此れに倣つて南方政策を重視し東方に意を用ひず、且つ庸君の域を出でず、加ふるに太宗と人皇王倍との二家系の間に皇位が往返して内訌廢弑絶えなかつた為め、対外活力一時減退してゐた。次帝景宗（九六九―九八二）は確に明君の列に入る可き資質の天子であつたが、その治国の力点を世・穆二宗の間に紊乱した内政諸問題の解決調整と国力蓄積とにおき、対外問題に就いてはつとめて姑息主義をとつた。兀惹部を中心とする渤海遺民勢力の復興した外的要因は実に契丹の五十余年（東丹國西遷の九二九年より景宗崩殁の九八二年迄）に及ぶ東方政策の空隙に在つたのである。

景宗に嗣いで立つたのは契丹第一の英主と謂はれてゐる聖宗（九八三―一〇三一）で、その在位実に半世紀近くに及ぶ。帝が即位した時、兀惹部の勢力は正に絶頂期に在り、その対契丹攻勢もクライマックスに達し、その全力を悉しての辺境攻撃は契丹に取りもはや一刻も放任を容さぬ一大脅威となつてゐた。かくて帝は即位後直ちに兀惹經略、即ち東滿洲經略に取掛り、着々と効果を收めて行つたが、已に大勢力に生長し切つた兀惹の根底的覆滅は容易でなく、加ふるに高麗関係の問題がその間に聯関し来り、完全經略の目的は帝の長い治世中にも遂に達成せられず、次帝

興宗の時代に持越された。

契丹の回跋部經略は兀惹經略の一部として行はれたものと見ることが出来る。回跋部が兀惹に帰属し、その反契丹活動も兀惹の指令に依つて居た以上、兀惹部經略が回跋部に及ぶは当然である。而して聖宗が回跋部經略に取掛り効果をあげ初めたのは大体に於いて開泰年間（一〇一二―二〇）以後で、その治世の後半期以後に当る。蓋し回跋部の反契丹活動が兀惹部と云ふ強大な勢力の支援乃至命令を背後に有つてゐる以上、その効果的經略は契丹が兀惹政権に相当の打撃を与へ得た後ちでなければ期待出来る筈なく、その經略が帝の治世の後半期に効果を著し初めたのも、要はそれ迄兀惹政権を撃碎することに時間を要してゐたからである。

聖宗の兀惹經略がその一代に完成しなかつたのと歩調を一にしてその回跋部經略も帝の一代では完成せられず、興宗の世に持越された。此れ亦当然と云へよう。以下、聖宗・興宗二代にわたる回跋部經略に就いて考説する。

I　聖宗時代の經略

聖宗時代の回跋部經略が効果を齎し初めたのは開泰八年（一〇一九）前後からであるが、此れは帝の兀惹部經略が進捗して兀惹政権が土崩瓦解したのが略々此の頃であつたからである。聖宗の兀惹經略は遼代滿洲史上の最大問題で、年数長く、規模大きく、内容複雑で、稿題の回跋部經略も要はその一部を構成する問題にすぎない。従つて此所に此れを詳考することは事実上困難である。只回跋部經略が有効的に行はれ初めるに至つた迄の大勢を概説して回跋部經略の考究に資しておく。

聖宗は先づ統和三年（九八五）、兀惹の子國定安國を転覆して兀惹政権の最大財源地帯たる鴨綠・佟佳江流域を奪つた。此の時の俘虜十万、馬二十万匹と伝へられるから、兀惹政権の受けた打擊の大きかつたことが知られる。次いで統和九年、契丹は鴨綠江口の地に三城を築いて兀惹管下の通古斯人と中国との交通断隔をはかつた。翌十年、兀惹部に比肩する滿洲の雄部鐵利（阿勒楚喀河流域）を契丹の味方に引入れた。かくて気勢挫けた兀惹は契丹に入朝して經略の緩和を策したが尙反契丹方針を棄てなかつたので、聖宗の經略は続けられ、十九年には達盧古都（最下流北流松花・拉林二水流域）、二十一年には五國部（三姓以東の松花江流域）の入貢を見、統和二十八年頃には兵を以て深く奥地を經略し長白山三十部女直を入貢せしめた。かくて兀惹部はその領内を蹂躙分断せられ、部内に内紛を起し、潰散して全く滿洲の覇権を喪つた。然し尙分散した余党各地に逃入蠢動して復興を策し、高麗亦暗に此れを助ける気配があつたので、開泰四年以後四年間にわたつて高麗を伐つた。[註1] かうして兀惹政権の統治体制を覆滅し去つた後ちはその遺民の懐柔經略が大きな仕事である。開泰年間より聖宗の回跋部に対する經略撫御の仕事が進められたのは、つまり順を追つた着実な政策の推進であつたと云へる。但し聖宗の經略は開泰年間に行はれた丈でなく、続く太平年間にも進められてゐる。以下項を分つて帝の經略を考説する。

(1) 開泰年間に於ける回跋部女直の入貢

遼史卷六一聖宗紀及び同書卷六九部族表に開泰年間に於ける回跋部入貢の記事を前後二回收錄して居る。此れを左に表示する。聖宗の治世（九八三—一〇三一）四十九年間を通じ、遼史の回跋部に関する所傳を收錄してゐるのは僅かに此の二回にすぎない、此の二記事が聖宗の回跋經略を考究する最も貴重な資料であることは云はずして明かであら

う。

表三　聖宗開泰年間回跋部入貢表

年号			西暦	月日	記事
契丹	北宋	高麗			
開泰八年	天禧元年	顯宗一〇年	一〇一九	三月癸未	回跋部太師踏剌葛来貢
同	同	同	同	七月己巳	回跋部太保麻門来貢

先づ此の両記事に就いて注意す可きは、その内容が共に入貢を伝へたものであると云ふことである。当時の慣例として入貢の開始は宗主・藩屬関係の成立を意味する。従つて此の両入貢記事は契丹の勢力が回跋部女直の間に或る程度の浸透をして行つたことを示すものと見て差支へない。

次に注意す可きは、入貢者が太師・大保等の尊称的官名を贈られてゐることである。契丹は藩屬の巨大勢力の長には王號を贈つてゐた。遼史卷四六百官志・北面部族官の項に依れば、王號を贈られた女直の勢力には曷蘇館部（遼東半島）長白山部等の國王號を受けたものと、蒲盧毛朶・嚴母・回跋等の部王號を受けたものとがあつた様である。かうした王號賜贈の制が出来たのは何時の頃か判らないが、とにかく回跋部が長白山・曷蘇館等の巨大部族には及ばないにしても、それに次ぐ有力部族であつたこと丈は認められよう。かうした大部族の内部には数多の有力酋長が居て部下を率ゐてゐた筈で、太師・太保を授けられた入貢者もそれ等多数酋長の一人と考へられる。而して太師・太保等と

並べられて居る彼等は、その尊称から見て相当有力者であつたであらうが、然しそれに比肩する者は他にも少くない程度の酋長で、恐らく回跋部の代表的最大酋長ではなかつたであらう。代表的大酋長は別に居たものと推想せられる。そしてそれは部王の称號を受く可きものであつたのである。つまり入貢者は回跋部内の有力酋長であつたとは云へるが、代表的最大勢力者であつたとは断定し難いのである。従つて此の入貢に反映される契丹の回跋部への勢力浸透を強大徹底したものと解することは出来ない。

次に注意す可きは此の開泰八年の入貢が回跋部入貢に関する遼史初見の記事なることである。只此のことのみから直ちに回跋部の正式入貢が此の年に初まり、それ以前には無かつたと速断することは許されないでらうが、更に前後の事情を併せ考へるに、此の場合はやはり初めての入貢であつたと推断して差支へない様である。

回跋部を制圧して居た兀惹部が衰頽の第一歩を踏出したのは聖宗の統和十年（九九二）からで、此の年鐵利部が離反して契丹に附し、次いで達盧古部・五國部等次第に此れに倣つたが、然も尚相当の威力を保持してゐた。兀惹部が潰散して他部制圧の政治的勢力を完全に喪失したのは統和の末（一〇一〇）頃、彼等がその根拠地たりし龍泉府の地から逃散した後ちであつた。そして此の兀惹部の潰散から数年後の開泰八年に回跋部の入貢が始見するのであるから、大勢上此れを以て彼等の正式入貢の最初のものと解して差支へない。思ふに統和末年の兀惹政権の潰滅によつて契丹の滿洲經略は愈々活潑効果的となり、鐵利・達盧古等に比して一段と反契丹的であつた回跋部も開泰八年以後漸く契丹に入貢する者を生じたのであらう。

遼史卷一六聖宗紀・開泰八年十月甲辰の條に

改東路耗里太保城爲咸州。建節以領之。

とあり、同書卷三八地理志・東京道・咸州の條に

咸州。安東軍。下節度。中略。乃招營・平等州客戶數百。建城居之。初號郝里太保城。開泰八年置州。兵事屬北女直兵馬司。

とあつて、従来耗（郝）里太保城と呼ばれて居た私城を、開泰八年十月、升せて節度州としたことが見える。此の咸州は今の開原の地に比定せられ、後述する如く、契丹の首都臨潢府方面より永州・龍化州・遼州を経て東京道に入る当時の交通幹線と回跋部とを結ぶ主街道上の要衝に位置し、遼末女直の形勢が不穏化した時、回跋部の統御を直接目的の一とする咸州兵馬詳穩司が置かれた所である。従つて此の開泰八年十月の私城とり上げ、節度州築設も必ずや回跋部の經略と関聯ある処置と見る可きであらう。殊に回跋部女直内亘酋の契丹への入貢開始が此の年の三月乃至七月の頃であつたことと、咸州築設が同じ年の十月であつたこととを照合すれば、此の咸州の経営が回跋部女直の經略に対応する辺境の修備であつたことは殆んど疑ひない。咸州の私城より節度州への升格を右の如く回跋部の經略に結びつけて考へると、その置州は此の時の經略が相当の成果をあげ、更に続いて一段の成果をあげ得可き見透しが立てられてゐたことを示すものと解するを妨げないであらう。

然らばかうした契丹の回跋部經略の成果は如何なる方法によつて行はれたのであらうか。武力による征圧か、それとも外交工作による招撫懐柔か。此の問題の究明は種々の意味で遼代回跋部女直の歴史を研究する上に重要な意義をもつ。そこで遼史を反覆検討するも、回跋部に契丹軍を送つた形迹は全然認められない。同様に招撫の使臣を送つ

た記事もない。如何に簡略な遼史と雖も征戰を脱落し去ることは考へ難いが、招撫の使臣差遣を逸する程度のことは充分考へられ、事実遼史に記されてゐない招撫使差遣のことが高麗史に伝へられてゐる例もある。因つて思ふに、開泰年間の回跋部の經略は武力征圧ではなく、遣使招撫によつたのであらう。果して然らば回跋部女直の中には契丹の招撫に応じて入貢藩屬した者の外に、尚此れを肯じなかつた者も居たであらうと推測せられる。事実さうした反契丹派の存在は半島側の史に就いて此れを証し得るのである。但しそのことに就いては後述する。つまり契丹の經略は招撫の方法により、従つてその經略は全回跋部人の間に徹底したものではなく、反契丹派を残してゐたのである。それはやがて契丹をして第二段の經略を必要とせしめたこと云ふ迄もない。

統和三年には兀惹政権の財源地帯たる定安國が覆滅せられ、十年には鐵利部が契丹に反屬して兀惹部衰退の時代に入り、十九年には達盧古部、二十一年には五國部が反屬し、更に統和二十八年頃の滿洲奥地に対する丹兵の經略に由つて開泰元年以後長白山三十部女直の契丹入貢が初まり、かくて女直諸部の続々と契丹に反屬して行くうちに在つて久しく接近を敢てしなかつた回跋部が開泰八年に至り一兵も被らずして入貢藩屬者を出すに至つたのは、彼等回跋部人の去就を回転せしむるに足る何らかの衝撃的事件のあつたことを想はせる。さうした事件を史の明記に求めることは出来ないが、筆者は此れを契丹の高麗に対する徹底的大遠征とそれに併行して行はれた定安國故地（鴨綠・佟佳江流域）に対する契丹の統治力の確立工作に在つたと推断する。

契丹は高麗の徹底的帰服、即ち北宋と断つて契丹に專屬することを強く要求し、屢々此れに兵を加へたが、開泰元年以後、所謂鴨綠江東六州（鴨綠江下流左岸の女直住地）の問題を中心として両国の関係悪化し、二、三年の両年に

わたつて征麗準備を調へた契丹は、四年正月愈々大軍を進発せしめ、爾後四年間、連年州縣を攻掠し、京師を燒き、八年に至つて困憊した高麗の請和を許した。回跋部人の初入貢は此の高麗大征戰が終りを告げた直後のことである。[註7]

契丹は高麗征伐と略々並行して舊定安國の地域内（鴨綠・佟佳江流域）に殘存せる反契丹勢力の掃蕩を断行した。それは彼等反契丹女直人、即ち定安國の餘衆が私かに高麗と相通じ、高麗を服屬せしむる為めには彼等の掃蕩を必要とすると共に、彼等を掃蕩する為めにも高麗への痛擊を必要とし、両作戰の同時並行を要したからである。その經略の始末は別に定安國の問題として專考を要するので此所に詳說するを避けるが、開泰の初め已に掃蕩に着手してゐ乍ら容易に完遂せられず、高麗の完全屈服を見るに及んで漸く成功した。高麗史卷四顯宗世家・九年（開泰七年＝一〇一八）正月の條に

定安國人骨須來犇。

とあるは、統和三年（九八五）契丹が定安國を屠つて後ちも此の時迄三十余年の久しい間、尙定安國を称する餘衆が拠つて契丹に叛抗し続けてゐたこと、それが高麗征伐と並行する經略に抗し切れず高麗に來犇（奔）したこと等を示す。此の反対勢力の掃蕩は此の地方に対する契丹勢力の徹底確立となり、契丹の州縣制統治が完成した。回跋部女直人の契丹入貢はかうした通溝平野への契丹の勢力確立の直後である。高麗の契丹への完全屈服、通溝平野の女直人勢力の契丹への專屬に次いでその直後に回跋部内一部酋長の契丹への入貢が初まつてゐることは、その間に何らかの深い脈絡があつたことを想はせる。

高麗は領内に入貢貿易し、又は境場に貿易する女直人を頗る優遇してゐた。此の問題も亦專考を要し、此所に詳究

するを避けるが、それは大渤海滅亡の前後から熾烈となつた彼等の侵略を緩和せんとしたこと、彼等の第一輸出品たる馬を購入して軍備を強化せんとしたこと、漸く迫り来つた契丹との対抗に女直を味方として利用せんとしたこと等に由る。契丹が高麗征伐に女直を併せ伐たなければならなかつたのは、かうした事情に因る。かかる次第で高麗に出入貿易する女直人は頗る多く、且つそれは近辺居住の者に止まらず、遠く龍泉府の故地や阿勒楚喀方面の部族に迄及び、此所に問題とせる回跋部人も交つて居た。高麗史巻五顯宗世家・十九年（契丹・聖宗・太平八年＝一〇二八）七月丁酉の條に、

東女眞嗜拔部落三百餘戸來附。

とあつて東女眞の嗜拔部落三百餘戸、推定人口約二千人の大集団が高麗に來附したと伝へてゐる。此の記事の詳考は後文に試みる予定であるが、嗜拔部落が回跋部落の異訳なる可きは一見して窺知せられるであらう。高麗が東女眞（東北女眞）と呼んだのは、その東北境たる和州（今の咸南道永興）登州（同安邊）方面より入来する者を指し、此れに対する西（西北）女眞は西北境の安北府（平安南道・安州）方面より入来する者を指し、必ずしも、その住地の区別によつてゐるのではない。勿論、住地と往来路とには密接な関係があつて、大体東北方面に住む者は東北境より出入してゐたが、中には同一人で或は東北境より入貢し、或は西北境より出入して、高麗から時に東女眞と呼ばれ、又西女眞と呼ばれてゐる者の例も少くない。上掲の東女眞嗜拔部落とあるのも、此の時の来投経由地が東北境であつたことを示すものと見る可きである。

嗜拔部落人の高麗投入は、その原因はしばらく措くも、回跋部と高麗との間に交通往来があり、然も相当親密に結

びついてゐたことを示すものと云へよう。高麗を投入地と択び、三百餘戸の大集団が遙々來附したことは、彼等の高麗との接衝往来が前々より相当親密に行はれてゐた証左と見るを妨げないであらう。事実、高麗に来投した右喰拔部人の酋長は高麗の散官たる大相を帶してゐて、従前よりの交通があつたことを証してゐるのである。註3 即ち此れによつて回跋部と高麗との間に交通があり、部人の高麗出入があつたことを知り得るのである。

高麗史は入貢女眞を大抵東女眞・西女眞等と記すのみで、その部族名や原住地に触れてゐる記事は極めて少い。又丹兵の焚掠に遭つて官廷の記録を喪つた為め、高麗史の記事は顯宗八年を境としてその前に少く、その後に詳となり、女眞関係の記事も、以前の部には寥々たる有様である。かうした関係で回跋部人の高麗入貢例を列挙するを得ないが、実際は相当出入してゐたであらう。

回跋部と高麗との関係をかく観察して高麗史卷五顯宗世家・九年（開泰七年＝一〇一八）二月乙酉の條に

西女眞麻捫・麻於達等來獻土馬。賜貨物。

とある記事に接するならば、此の麻捫は翌年七月、契丹に入貢した回跋部太保麻門に当る人物であらうと見る解釈も肯定せられるであらう。西女眞の称が只その入麗の経由地を示すだけで、原住地と関係のないことは已述の如くである。顯宗八年以前の記録が契丹に燒かれた為め、麻門が此の年以前にも入貢してゐたか否かを確めることが出来ないが、恐らくは従前から往来してゐたものに相違あるまい。同一女直人の契丹・高麗両国への入貢は両国から頗る嫌悪せられてゐたが、それにも拘らず交易の利を趁うて私かに両属して居た者の例は高麗史に多数伝へられてゐる。回跋部人の高麗西北辺への交通路は当然通溝平野を経由した筈で、恐らく輯安・滿浦・安州の歴史的大街道を通つたので

あらう。麻門が此の街道に由つて高麗に往来した時は、通溝平野の反契丹女直人、即ち定安國の餘衆が契丹に掃蕩せられ、高麗又契丹の痛擊に手を挙げた時で、彼は此の狀勢を具に目睹耳聞して帰つたのである。そしてその直後契丹の招撫に応じて入貢してゐるのであるから、彼の契丹への藩屬が定安國故地及び高麗の契丹への完全屈服を転機としたものであることは自ら認められるであらう。つまり開泰年間の回跋部内一部長の契丹への入貢藩屬は契丹の定安國女眞及び高麗に対する完全制圧の成功が齎した一影響としての回跋部經略の第一段的成功であつたのである。尚定安國女眞や高麗の契丹への屈服が遠く離れた回跋部人にかくも大きな影響を与へたのは何故か、此の点が問題として残されるが、此れに就いては更めて論及する。

(2) 太平年間に於ける回跋部女直の高麗投入

高麗史卷五顯宗世家・十九年七月丁酉の條に

東女眞噲拔部落三百餘戸來附。

とあつて噲拔部落三百餘戸の来投を伝へてゐることは先に紹介した所である。此の年は聖宗の太平八年（一〇二八）に当る。同卷には更に一年を経た翌二十年八月乙未の條に

東女眞大相噲拔率其族三百餘戸來投。賜渤海古城地處之。

とあつて同じく東女眞大相噲拔がその族三百餘戸を率ゐて高麗に来投したと伝へ、前年と頗る相似た記事を伝へてゐる。只後者に於いては此れを渤海の古城に處いたとある丈詳しい。又後者は噲拔を酋長の人名の如く扱つてゐるが、此れは恐らく誤りであらう。大相は高麗より授かつたものと解せられる。高麗史卷七百官志によるに、文散階に大匡

・正匡・大丞・大相あり、武散階にも大匡・正匡・佐丞・大相があつたと云ふが、契丹には大相の散官は無い。契丹の子國東丹國の中臺省（最高行政府）に左大相・右大相の職官があつたが、此れは此の国の大臣職で、散官ではないから外夷に与へられた筈がない。此の大相を帯した噲拔部長の人名は逸せられてゐるわけである。顯宗・德宗時代を通じて高麗は此の大相を入貢の女眞酋長に多数授けてゐたものの如く、その例は世家に重出してゐる。来投酋長の大相帯任は彼等が従前より高麗に往来してゐたことを示すものである。又高麗が彼等を特に渤海の古城に安置したとあるは注意す可きで、彼等が渤海國と特殊の縁故を有する者であつたことを思はせる。恐らく嘗て回跋女直の間に投入した渤海人を中心とする一団、いはば渤海人系回跋女直であつたのであらう。

さて世家の伝へる所に従へば、噲拔部落人の高麗投入は正に一年を距てて前後二回行はれたこととなる。然し此の重回には多少の疑問無しとしない。

遙か後年の事件であるが、朝鮮・世宗の五年（一四二四）、輝發河の地に住して居た建州左衛の童猛哥帖木兒が嘗ての住地であつた阿木河（會寧）に還住せんとした時、先づ配下の童家吾下等二十七人を高麗に遣して予め此れを通告し、且つ糧食等の接済を乞ひ、その諒解を得て後ち移住した例がある。予告は四月、移住そはの二箇月後であつた。移住数は約千戸六千人で、その中の半数五百戸が六月の初めに先づ阿木河に至り、後の五百戸は翌七月に到着して居る。此の両回分進は移住者の数が多かつた為めであらう。[註4] かうした後年の例から推すと、前掲噲拔三百戸づつ二回の来投記事は、その実予告と実際到着との誤伝ではないかとの考へが浮かぶ。然しその間の距り一年余は余りにも悠長の感が深い。然らば両回分進かと云ふに、此れ亦一年余の距りは長きに失し、且つ六百余戸の一時移住もさほど

困難であつたとは思へない。そこで更に考へるに、前回と後回との内容はやはり同じ部族で、前回は彼等の高麗来投を伝へたもの、後回はその渤海古城への安置を伝へた序にその由来に溯言したものであるかも知れない。かくて回跋部女直の高麗投入が一回三百余戸か、二回六百余戸かに就いては疑問があるが、とにかく相当集団の亡命があつたことは紛れない。そのことは此の太平八年の頃、回跋部女直人の間に一大動揺のあつたことを暗示する。それが單なる内紛か、契丹の圧迫に由るかは、外に全然史料がない為め簡單に究明することは困難である。此の前後の回跋部に触れた記事は契丹・高麗側何れにもないのである。然し亡命先が高麗であり、亡命者が渤海縁故者であつたことは、彼等が反契丹派の有力者として契丹の經略を被り、住地を逐はれたものではないかとの推測を抱かしめる。因みに顯宗十九年正月の條には

骨夫率部落五百戸來附。

とあつて、嗜拔以外にも有力女直集団の高麗への亡命があつたことが知られる。以下、此れらの亡命と契丹の經略との関係の有無に就いて考察して見る。

契丹と抗争した兀惹部は統和末年に至つてその本拠を逐はれ潰散したが、その餘衆は尙女直諸部の間に潛入し、反契丹派の勢力と結んで抵抗を続けた。そこで契丹側でも此れら兀惹人の残党狩りが女直の經略と並行して必要となり、その捜捕を継続してゐた。遼史卷一五聖宗紀・開泰元年八月丙申の條に

鐵驪那沙等送兀惹百餘戸至賓州。

とあり、同卷一六太平二年五月庚辰の條に

鐵驪遣使獻兀惹十六戸。

とあつて鐵利部が盛んに兀惹人を捕へて契丹に獻じてゐるのは、かうした兀惹人狩りの契丹の方針を奉行したものである。鐵利部のみ特に兀惹人狩りに熱心であつたのは、早くから鐵利は渤海・兀惹に叛抗心を抱き対立してゐたからである。[註5] 又兀惹の捕虜を賓州に置いたのは、此の州が兀惹人の捕虜のみを以て統和十五年に設置したものであり、[註6] そこで一括統轄せんが為めであつた。かうして兀惹人狩りが進められつつあつた時、此の兀惹人の最も多く竄匿してゐるのは蒲盧毛朶部女直であることが判り、早速此れが追捕に着手した。

遼史卷七聖宗紀・太平六年四月戊申の條に

蒲盧毛朶部多兀惹戸。詔索之。

とあるは此のことを伝へた記事である。此の記事と聯関して注意す可きは遼史卷八大康乂傳に

大康乂渤海人。開泰間累官南府宰相。出知黄龍府。善綏撫。東部懐服。楡里底乃部長伯陰。與楡烈比來附。送于朝。且言。蒲盧毛朶界多渤海人。乞取之。詔從其請。康乂領兵至大石河駞準城。掠數百戸以歸。未幾卒。

とある記事である。兀惹人は時に渤海人と呼ばれることがあつた。蓋し彼等は久しく後渤海の実権を執り、渤海遺民の中心勢力となり、その利害を代表し、且つ生活も恐らく渤海人化して居た為めであらう。従つて「蒲盧毛朶界多渤海人」とは「蒲盧毛朶界多兀惹人」と同じこととなる。即ち蒲盧毛朶部に兀惹人の多く投入してゐたことを知つたのは楡里底乃部女直の來附を受けつけた知黄龍府の大康乂（契丹に臣服の海渤人）で、彼はその追捕を奏上し、それに依つて索捕の詔が出たのである。それと共に彼は自ら兵を領し大石河駞準城に攻入つてゐる。

蒲盧毛朶部の住地に就いては、間島地方なる海蘭河流域なりとする和田博士の説があり、池内博士は初め此れに讃せられ、次いで咸興なる城川江流域なりとする説に改められ、現在では両説のままとなつてゐる。[註7] その非是は容易に決し難い所であらうが、筆者の見解では少くとも聖宗時代の蒲盧毛朶部は咸興方面に置くのが妥当の様に想はれる。尚池内博士に依れば楡里底乃部も附近の一部族で、大石河は咸興平野を貫流する城川江以外の四水の一、駆準城はその畔に在つたものであらうと云ふ。[註8] して見れば、黄龍府は遠く咸興方面の女直に対する契丹の經略の一基地となつてゐたわけである。然し契丹の蒲盧毛朶部方面經略は黄龍府のみを唯一の基地としたのではない。黄龍府に並ぶ重要基地に遼陽府があつた。遼史巻九一興宗紀・重熙十三年四月己酉の條に

遣東京留守耶律侯晒・知黄龍府事耶律歐里斯。將兵攻蒲盧毛朶部。

とあるは基地としての遼陽府が黄龍府と並んで重要であつたことを示し、又契丹の蒲盧毛朶經略が長く興宗の世に及び、その容易ならぬ難事業であつたことをも暗示するものである。尚咸興方面に対する契丹の経略が黄龍・遼陽二府を基地として併せ使用せられてゐたことを示す例は他にも見受けられる。[註9] かうした両基地の関係を考へると、太平六年四月、黄龍府が蒲盧毛朶部經略に乗出した際、遼陽府もそれに歩調を協せて活躍したに相違ない。遼史は此の時の遼陽府の活躍に関する記載を缺いでゐるが、それは明かに疎漏で、高麗史巻五顯宗世家・十七年（太平六年）閏五月甲子の條に

契丹遣御院判官耶律骨打、來請假途將如東北女眞。不許。

とあるは此の遼史の缺を一部補ふに足る所傳と解せられる。即ち四月に蒲盧毛朶部内兀惹人の索捕命令を出した契丹

は、直ちに耶律骨打を遣して東北女眞（即ち咸興）方面に使せしめたのであらう。骨打は恐らく東京遼陽府で策を練り、そこから高麗の北邊に来り、高麗の領内を通つて咸興方面に入らんとしたのであらう。その使命は蒲盧毛朶部を經略するに当つて先づ親契丹派の女直を糾合せんとするに在つたのであらう。即ち耶律骨打の活躍は遼陽府を基地としてゐたと解せられるのである。續資治通鑑長編卷一五天聖五年十二月己丑の條に契丹より使還した孔道輔の言をのせて

道輔曰。契丹比為黑水所破。勢甚蹙。云云

とて契丹が黑水の為めに破られ勢力蹙まつたと伝へてゐる。なかなか誇張された報告の様であるが、丹軍が黑水を攻めて時に敗れたこともあつたと見るぐらいは容されるであらう。此所に云ふ黑水は黑水女眞のことで、蒲盧毛朶部と同様咸興地方に拠つてゐたもの、蒲盧毛朶部とは元来此の女眞の一部族と云はれてゐるから、黑水が契丹を破つたとは、或は契丹の蒲盧毛朶部經略軍が時に敗北したこともあつたのを伝へてゐるのではないかと思はれる。そしてそれは太平七年に契丹より使還した宋人によつて伝へられてゐるのであるから、その敗戰は前年か此の年の初めであらう。尙蒲盧毛朶攻撃に就いては論ず可き問題が多々あるが、專考の機会にゆづることとし、此所では只黄龍・遼陽両府を基地とする相当に大がかりなものであつたこと、長年を要してゐること等を一言するに比めておく、但し蒲盧毛朶部の徹底的經略には長年を要したとは云へ、六年開始の經略で徐々乍ら翌七年以来効果を現してゐた。遼史卷一七太平七年正月甲亥の條に

蒲盧毛朶部遣使來貢。

とあるはその証である。遼史の蒲盧毛朶部入貢を伝へるは此れが最初であり、事実亦初入貢であつたと想はれる。更に同書卷六九部族表には同年三月に繫けて

女直押蒲盧毛朶部送來州收管。

とある。文意稍々明解し難いが、然し契丹に協力して蒲盧毛朶部に当つた女直部族のあつたこと、蒲盧毛朶經略成功の一因が此の協力に在つたこと等を窺ふに足る。つまり親契丹派女直が動員せられてゐたわけで、耶律骨打等の使行はかうした効果をねらつてゐたものであらう。

以上、太平六年に開始せられた蒲盧毛朶部經略はそこに潛入せる兀惹人、即ち反契丹的渤海系女直人の索捕を目的とし、それには親契丹派女直人を利用し、翌七年以来徐々乍ら効果をあげてゐたのである。兀惹人の索捕は聖宗即位以来の契丹の変らぬ方針で、それが蒲盧毛朶部經略と聯関して一段と強化せられたと見ることが出来る。若し他の女直部族、例へば回跋部内にも反契丹的渤海系女直人が居たとすれば、それ亦索捕の対象となり、太平六年以来捜索厳急を加へたことは当然想像せられる。

翻つて回跋部女直の形勢を見るに、已に開泰八年の經略に依つて契丹に入貢藩屬する酋長が現れて居た。然しその經略は用兵征圧では無く、招撫懐柔であつた。従つて回跋部を挙げて向契丹一邊倒の服屬を見たのではなく、尙反契丹派の酋長を残存してゐたと想はれる。果して然らばそれらの者は契丹の捜捕の対象となり、太平六七年の蒲盧毛朶部内兀惹人狩りと併行して追求せられたであらう。此の圧迫に堪え得ずして出奔したのが太平八年高麗に亡命した噲拔部落三百余戸であらう。彼等が渤海系であつたと推測せられることは已に考説した如くである。但し此の時も契丹

が回跋部に兵を加へた形迹は伝へられてゐない。恐らく回跋部内の親契丹派女直を糾合し此れを援けて反契丹派を圧迫したのであらう。

回跋部の住域たる輝發河の流域は遼陽方面と三姓方面とを結ぶ交通の大幹線をなし、此の幹線から又歴史的な重要街道が派出し、奥滿洲の經營には確保缺く可からざるものであつた。又契丹本土から東進して咸州（開原）方面に出で貴德州を經て長嶺府（回跋城）の故地北山城子をすぎ、蘇子河流域を經由して通溝平野や朝鮮に入る街道もあつた。かうした交通上に占める輝發河谿谷の重要性を想ふ時、契丹の奥滿洲勢力の經略や朝鮮經營がその往来路としての回跋部の經略を併せ行つてゐる所以は自ら理解せられるであらう。太平年間の第二回目の經略によつて回跋部に対する契丹の勢力は一段と浸透強化したと見て大過ないであらう。

註　1、聖宗の兀惹經略に就いては別に專考の予定である。

2、契丹・聖宗の高麗征伐に就いては池内博士著「滿鮮史研究中世第二册」所收「契丹・聖宗の高麗征伐」に論究されてゐる。筆者も亦自己の立場から此れを扱ひたい所存である。

3、後文に論述。

4、滿鮮地理歴史研究報告第一四、一五册所收、和田博士「明初の滿洲經略」参照

5、鐵利部は北滿の雄部で、史上に活躍すること數世紀に及び、大渤海の建國以来、渤海人に反抗して来た歴史を有つてゐる。此のことに就いても別に專考したい考へである。

6、遼史・卷三八・地理志・東京道・賓州の條参照

7、滿鮮史研究中世第二册所收「完顏氏の易嶺甸經略と尹瓘の九城の役」の附說「蒲盧毛朶部に就いて」及び東洋学報六卷所載、和田博士「定安國に就いて」參照

8、註7に同じ。

9、聖宗の統和十三年、東京留守蕭恒德が和朔奴と共に、当時阿勒礎喀方面に住してゐた鐵利の地を經て龍泉府の故地に拠つてゐた兀惹を伐ち、更に東南の地に深く侵入し、蒲盧毛朶部を攻めて却つて大損害を被り、高麗の北鄙を循り、今の長津・江界・滿浦・輯安を經て歸國してゐるのも、蒲盧毛朶部方面に対する契丹の經略基地が黄龍、遼陽二府に在つたことを示す一例である。